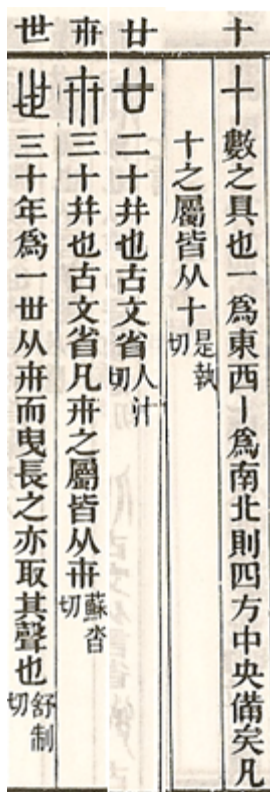


“世”の字源と語源をめぐって

遠藤 光暁

董同龢『上古音韻表稿』(もと1944年, 台聯国風出版社, 1975年, p.59)は「世 *siäi*:葉 *iäp*——‘世’可能来自 *siab*。」(原表記では *i* はいずれも音節副音の記号つき)と述べる。つまり, この諧声関係から, 「世」はもと入声・*p* に対する陰声であったと推定する。

④ ③ ② ① 『説文解字』(中華書局(香港)有限公司, 1972年, pp.50-51)には「世」(④)は「三十年為一世, 从𠂇而曳長之, 亦取声也。」とあり, その前字「𠂇」(③)は「三十并也。古文省。凡𠂇之属皆从𠂇。」である。「十」(①)については「数之具也。一為東西, 一為南北, 則四方, 中央備矣。凡十之属皆从十。」とあり, 「廿」(②)の「二十并也。古文省。」と合わせて考えてみるに, 「廿」の字形を「二つの十が並んだもの」, 「𠂇」の字形を「三つの十が並んだもの」と許慎が説解したものと読める。



段玉裁は「廿」の説解について, まず『韻会』所引に基づき「古文省多。」に校訂し, 更に『周礼』『考工記』を引きつつ「廿」が「二」と「十」とで句読が切れるとすべきことから周代には「廿」を「二十」の二音節で発音していたと推定し, それに基づき許慎の説解はその二字(「多」)を一字に省いて記した合文である旨を述べたものと解し, 更に秦碑の例を引いて秦代には既に一音節で発音されるようになっているとしている(『説文解字注』上海古籍出版社, 1981年, p.89)。同様にして, 「𠂇」の段注でも「此亦当云省多。奪也。」と言っており, 文献学的な根拠がないため校訂はしないものの, 本来は「多」があって, 脱落したものと推定している。やはり一字ではあるが古くは「三十」と発音されていたと推定することになる。¹

その「𠂇」が声符として機能しているのであれば, 「世」も単に「三十年」という意味を

¹ 大西克也氏の教示によると, 「廿」には新蔡楚簡乙4-6号簡のように重文符号付きのものがあって明らかに「二十」と読んでおり, 一方『石鼓文』作原に「為卅(三十)里。」という一句があり, 四字句であることから考えて, やはり「三十」と読まれていたらしく(郭沫若『石鼓文研究』もと1939年, 『郭沫若全集』考古編第9巻, 74頁, 北京, 科学出版社, 1982年所収), 秦碑「維廿六年」が四字句に合わせて「廿」を一音節で読んだのと好対照をなす由である。

持つだけでなく、語源的にも「三十」に由来する可能性がある。その場合、それが合音によって一音節となり、generation という意味や world という意味が派生するのに応じて入声から去声に変えられ、入声-p に対する陰声が音変化によって入声-t に対する陰声に変化するに至ったと考えることになる。²

ちなみに、『古文字詁林』第2冊(上海教育出版社, 2000年, pp.709-712)には「世」の古文字の字例と諸家の字解が集成してあるが、甲骨文の字例はなく、金文以降の字例が挙げられている。同書の「十廿世」の古文字の字形と比較しても、「世」の字形を「十」が三つ並んだ要素を含んだものと見立てて差支えないようだが、『説文解字』の説解「从世而曳長之, 亦取声也。」はどう理解したらよいだらうか。

段玉裁は「曳長之」に対して「曳長之, 謂末筆也。」と言い、「世」の末筆の横棒を指すものとし、更に「亦取声也。」に対して「末筆曳長, 即為十二篇之ㄣ, 从厂反, 亦是[才世]引之義。"世"合世、ㄣ, 会意, 亦取ㄣ声為声, 讀如曳也。許書言"取其声"者二, 禿取栗声、世取曳声也。曳从厂声, 厂、ㄣ一也。舒制切。十五部。毛詩"世"在十五部, 而"葉"、"葉"以為声, 又可証八部与十五部合韻之理也。」(末筆の「曳長」とは十二篇の「ㄣ」のことであり、厂的反面の字形で、それも引きずるという意味である。「世」は「世」と「ㄣ」の会意で、「ㄣ」の発音を声符ともしている。許慎の書で「取其声」には、「禿」は「栗」の声を取る、「世」は「曳」の声を取る、の2例ある。「曳」は厂声に従い、「厂」と「ㄣ」は同一のものである。舒制切。十五部[引用者注、祭部を含む]。毛詩では「世」は十五部にあるが、一方「葉」「葉」はそれを声符としており、ここでも八部[談葉部]と十五部が合韻することわりが証せられる。)と言う(同一箇所)。

「世」が「三十」に由来するとする解釈からすれば、「从世而曳長之, 亦取声也。」は「世」に従い、それを引き伸ばしたものであり、また声符としたものでもある。」と解され、「…而曳長之」は当然のことながら「引き伸ばす」という動詞句として解され、声符となっているのは「曳」ではなく「世」である。即ち、許慎も「世」と「世」の間の音声的類似を認めていたこととなる。『説文通訓定声』(中華書局, 1984年, p.675)が「按, 音讀亦世之声轉。」はそのように解釈したものであろう。




一方、許慎の解釈とは異なり、「世」を「止」の系統の字だとする解釈もある。白川静『説文新義』卷三(五典書院, 1970年, p.26)は「ただ字は世に従うというも、金文は多く止字形に作り、ときに木に従う。縦画の上端に近く、それぞれ肥点を加えることが多い。世・葉・葉の関係からいうと、この肥点は新生の萌芽の象ともみられ、|の肥筆の状とやや異なるようである。三十を世というが、世が世に従うとするのは疑問である。呉大澂の字説にいう。

葉世二字、古本一字、詩長發、昔在中葉、伝、葉世也、文選吳都賦、雖累葉百疊、劉注、葉猶世也、淮南子、称誉葉語、注葉世也、凡訓世之葉、疑即从木之世字

² 俞敏 1948 「論古韻合怙屑沒曷五部之通轉」『燕京學報』34, 38-39, 45頁(俞敏 1984 『中国語文学論文選』132, 136頁, 光生館)を参照。

なお歩字形の図象を「此世字之最古者、世止同音、古或相通、詩、繩其祖武、武亦足迹」というが、世の字形は止に類するとしても、趾と解しては肥点の説明が困難である。

文二。すでに述べたように、世は十系統の字、世は止形の字であり、両字は系統の異なるものと思われる。」とする。

何琳儀『戦国古文字典』（中華書局、1998年、p.917）も「世、甲骨文作（類纂〇八九六籀作）。从止，加三。分化為一。止亦声。一，透紐；止，端紐。端、透均属舌音，一為止之準声首。指事兼形声。」という。何琳儀の引くという字形ならば葉を指したものであるとしても納得が行くが、金文の「十廿世」の肥点は真ん中にあるので、葉を指したものと俄に信じがたい。

字形について言えば、確かに「止」の構造を持っているのだが、音声的には「葉」の声符になることが説明し難いであろう。

「世」と「葉」との関係について言うと、Axel Schuessler, *ABC Etymological Dictionary of Old Chinese*, University of Hawai'i Press, 2007, p.562 は「葉」の同源語として"世(šiäi^c) LH śas, OCM *lhats < *-ps 'Genertation, epoch' [Shi] > 'world'[Li] (Pulleyblank 1962: 234). 中略 [<]iterative devoicing of *lap (§ 5.2.3), +s/h-suffix (§ 4.2), meaning successive foliages of a tree > generations. [E] The relationship with WT *rabs* 'lineage, succession of families, generation' is not clear because the initial correspondence is unusual (OC *l = WT r)."を挙げ、「木の次々と生える葉」から「世代」の「世」の意味が生じたと解釈している。同書 p.53 では反復相接頭辞 s- の例の一つとして「葉」>「世」が挙げられている。

ここで、大西克也氏の教示によると、楚簡では「世」と「桀」とが同じ字で書かれる(例: 上博楚簡『容成氏』40号簡の「桀」と42号簡の「世」)由である。この事実をどのように理解したらよいかは熟考せねばならないが、音韻的には「世」の韻母がすでに祭部に変化していることは確かであり、更にこのことから「世」の声母が第一口蓋化に関連するものであり、より古くは牙喉音に由来する可能性もあることになろう。

小文はもともと『説文』に基づき「世」が「三十」に由来することを論じようとしたものであったが、甲骨・金文・戦国文字の関連事象を検討していくと、事はそう簡単なものではなさそうなことが明らかとなった。これまで上古音研究の根拠として用いられる諧声系列は古くとも漢代の『説文』であり、甚だしきに至っては便利な工具書があつて字数が多く揃うことから『広韻』すら使われることが最近でも珍しくない。しかし、先秦の一次資料の形音義に渡る検討を経ねば危ういことをこの一字の例だけからも痛感させられる。